



重要文化財

大安寺本堂ほか 7 棟 保存修理工事 本堂完成報告

- ▼ 本堂のこれまで
- ▼ 破損状況について
- ▼ 修理方針について
- ▼ 工事の経過



本堂のこれまで

大安寺は越前藩主・松平家の菩提所として万治元年(1658)から建築が始まり、本堂は**万治3年(1660)に完成**しました。修理前は瓦葺の大きな屋根が印象的だった本堂ですが、建立時は上部が茅葺、下部周囲と玄関がこけら葺という**二重構造の屋根**でした。当初は瓦葺の屋根にする予定が、何らかの理由によって茅葺とこけら葺の二重構造になったと寺に残る古文書が伝えています。

内部は仏間、室中と呼ばれる場所を中心に左右それぞれ二部屋があり、ぐると縁が取り囲んでいます。仏間に向かって左奥の部屋は“御成の間”として藩主を迎える為に使用していた部屋です。襖や腰障子に描かれている絵はすべて、福井藩の御用絵師である狩野元昭によるものです。

壮観な伽藍が現在まで良好に保存されていることや各建物が禅宗様を基調とし、意匠に秀で、福井藩大工の高い力量を示していることが評価され

平成20年(2008)には本堂、庫裏、開山堂など主要建築物が**国の重要文化財に指定**されました。

本堂は**建立から365年**が経っていますが、屋根の葺替や壁などの細かな修理はその都度行っていたようです。記録に残る大きな工事としては、明治21年(1888)にこけら葺だった屋根の下部周囲と玄関が瓦葺になり、明治44年(1911)には茅葺だった上部も含めて一体の瓦葺の屋根になりました。その後は昭和16年(1941)に仏壇の拡張、平成16年(2004)には玄関の屋根が銅板葺になりました。その他にも雪害などのたびに修理が行われてきました。

しかしながら、経年による破損の進行が随所に見られるようになり、**根本的な対策**が必要となりました。このような状況のもと今回、国、福井県、福井市の指導、補助のもとで保存修理事業が行われることになりました。

破損状況について

大安寺境内地は山の斜面を造成して作られているため、山の裾側である東側(本堂正面側)の地盤が弱く、本堂の基礎は南東側ほど沈み込んでいました。この影響により、本堂は**全体的に南東側へ傾斜**している傾向がみられました。このため、建具の開閉にも支障をきたし、目視で確認できる変形や歪みも多くみられました。

天井裏でも骨組の歪みや傾斜がみられ、柱と柱を繋ぐ小屋貫の継手が外れている箇所も多くありました。登り梁の腐朽による破損もありました。

柱の腐朽も多く、床下は柱足元に継木、飼木等の調整が多くしてありましたが、一部にはシロアリの被害も確認しました。



北側畳廊下

とりわけこの柱の基礎の沈下が著しく建具ごと傾いているのがわかります



床下

傷んだ部分を切り取り、替わりに木材のバッキンを入れてしのいでいました



天井裏

骨組が歪み、柱を繋ぐ小屋貫の継手が多くの箇所を外れていました

修理方針について

本堂は柱、梁等主要部分は残して部材を取り解き、破損部を補修する**半解体修理**としました。

まずは建物部分を覆う**素屋根**を建設し、建物は骨組部分だけとなるように**解体**しました。その際に解体した古材は調査の上、再利用できるかどうかを判断していきました。

そして、建物全体を持ち上げる**揚屋工事**を行い、柱や基礎部分の補修をしました。その後、建物を降ろして傾斜などを調整し、**組立工事**を行いました。



✓文化財建造物の保存修理工事について

文化財は基本的に「**現状を維持する**」ことが原則です。修理はやむを得ず行うものであり、必要最低限の範囲に留めることになっています。そのため**可能な限り古材を再利用し、伝統的な技術で行います**。

また、解体を行う際は必ず緻密な調査も行い、残された資料や解体に伴う調査の結果として**復原**を行うこともあります。

工事の経過

素屋根の建設

本堂の解体工事を始めるにあたって、まずは本堂を覆う**素屋根**を建設しました。素屋根とは、主として修理中の建物の保護のためにその上部を覆い屋として架けられる仮設の建物のことです。今回は本堂全体を覆うように架けました。素屋根があることで屋根のすぐ下にしっかりした足場を作ることができ、解体作業を進めやすくなります。また、解体であらわになっていく上部への雨風の侵入を防ぎます。

周辺の建物を解体しました



周辺樹木等を撤去しました



まずは本堂周辺の樹木等を撤去し、塀中門や廊下・客寮など**本堂周辺の建物を解体**しました。

解体した建物は数年後、工事の終盤に再び組立工事を行います。そのため、しっかりと調査を行ったうえで解体を進めていきました。

素屋根妻足場 組立中



素屋根トラス 組立中



スライド工法によるトラス組立



今回の素屋根工事では、トラスという屋根骨組の部材をクレーンで持ち上げ、上で組み立ててから人力で移動させる**スライド工法**を用いました。その様子は動画でもご覧いただけます。

素屋根の内部には作業の為の棚足場や部材保管用の棚、大きな部材を運ぶためのクレーン、火災報知機などの防火設備、見学台も設置しました。

[\スライド移動の動画はこちら／](#)



屋根折板張り



素屋根 建設完了



素屋根内部 棚足場



🏠 屋根の解体

素屋根完成後、まずは屋根の**棧瓦葺解体**が始まりました。この時点では瓦葺に復旧する予定だったので、瓦一枚一枚に番号を振ってから解体を始め、ひとつずつ丁寧に調査し、再利用できるものとできないものに分けて保存しました。



【瓦の調査方法】

まずは本堂の 15,000 枚以上の瓦一つ一つに番号を振りました。目視による割れや欠けの調査だけでなく、**瓦を叩いた音による調査**も行い、目で見るだけでは分からない傷みを確認し、使用できるかどうか判断していききました。



屋根瓦解体中



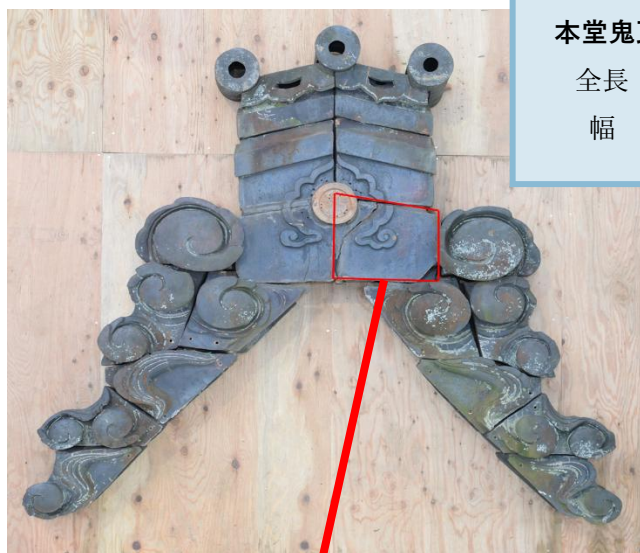
一枚ずつ解体しています



瓦解体完了

▶▶ 解体した鬼瓦の刻銘から分かった製作者

本堂の両妻には大きな**鬼瓦**がつけられていました。1つの鬼瓦は複数に分割して製作されており、手作業で丁寧に取り外しながら、降ろしていききました。



本堂鬼瓦の大きさ

全長 約 1.8m

幅 約 2.1m



パーツのひとつひとつには制作した鬼師の名前も刻まれていました。そのうちのひとつには「明治四四年」の刻銘もあり、この鬼瓦が製作された年代が分かりました。明治 44 年というのは、既に発見されている棟札から本堂の屋根が瓦葺になった年であることが確認されています。



明治四四年十月上旬
吉 又 田 吉

足羽郡麻生村

三十八社

「吉田又吉」という名もその棟札に「瓦焼師」として書かれており、ここでも情報が一致していました。

「足羽郡麻生村三十八社」は現在の福井市三十八社町にあたり、「吉田又吉」が**地元の鬼師**だと新たに判明しました。

▶▶ 軸部まで進んだ解体

瓦をすべて取り外した後は下地を剥がし、**木部も解体**していきました。屋根が大きいので、ひとつひとつの作業に時間がかかります。

本堂の大きな屋根は、垂木や母屋など一つ一つの部材が組み合わさって出来ています。その木材を手作業で取り外していきました。破風板のような大きい部材は、素屋根に設置したクレーンで運び降ろしました。



屋根下地解体中



下地の解体が完了しました



木部も解体しました



クレーンで降ろしています

🚧 内部の解体

屋根の解体を進めていきながら、**内部の解体工事**もスタートさせました。建具を外し、壁や床板なども解体し、骨組だけが残る状態にまで解体していきました。

ここでも屋根と同じように、元々使われていた場所が分かるように全ての部材に番号を振ってから解体し、繕って再利用するため保存場所へ移動しました。



床板を取り外しています

▶▶ 漆喰壁の掻き落とし

漆喰部分を掻き落としています



まずは漆喰壁の**掻き落とし**作業を行い、小型のくわ鋤を使いながら丁寧に掻き落としていきました。

小舞と呼ばれる編み目のような下地部分が見えてくるまで掻き落とすことで、これまでの修理歴や当時使われていた材料、工法を調査しました。

本堂内部は**土壁の漆喰仕上げ**になっています。土壁ですので、地震や建物の変形のために壁下地材から剥がれ落ちている箇所がありました。そのため今回は土壁も全て解体して、伝統的な技法で塗り直しています。

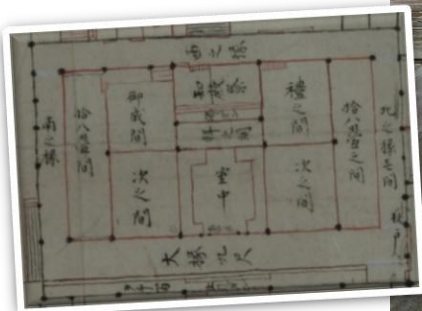


漆喰を塗り直しているのが分かります

▶▶ 畳を外して確認できたこと

仏壇前の部屋は室中と呼ばれており、修理前は下の写真のように全面畳敷になっていましたが、畳を外してみると一部が拭い板(表面を削って滑らかに仕上げた板)になっていました。その形は寺に残されている古絵図と一致しており、以前はその部分には畳を敷かず使用されていたと思われます。

古文書には開山である大愚の100年忌の際に拭い板のところに畳を入れて法事を行ったという記載もありました。建築当初から現在に到るまで用途に合わせ臨機応変に使用していたことが窺えます。



修理前は全面畳敷でした



畳を外したところ

✓ 屋根の修理方針を変更

解体や寺に残る古文書などを調査した結果、建築当初の本堂の屋根は修理前のような全面瓦葺ではなく、茅葺とこけら葺の二重構造になっていたことが分かりました。

解体工事中の調査ではこけら葺に使用していた板や釘も発見し、裏付けとなりました。棟札からは明治21年(1888)にこけら葺だった屋根の下部周囲と玄関が、明治44年(1911)には上部の茅葺部分がそれぞれ瓦葺になったと分かりました。

発見したこけら板と釘



江戸中期頃に描かれた大安禅寺境内図
(本堂部分抜粋)



上のように一旦解体が完了していた屋根でしたが、計画の変更に伴って解体をさらに進めることになり、最終的には右のようにまで解体しました。

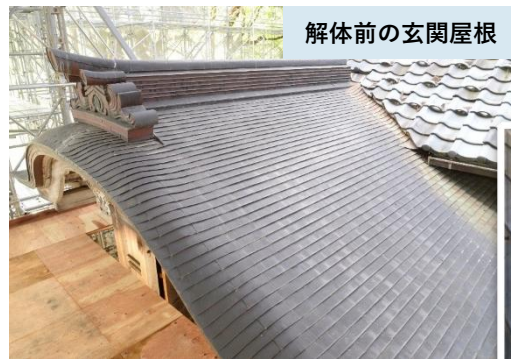
それらを踏まえた協議の結果、今回の修理工事では上部茅葺と下部周囲こけら葺という**建立当初の屋根の形に復原**することになりました。積雪の影響も考え上部は茅葺型銅板葺になっています。



▶▶ 玄関も解体しました

平成 16 年(2004)に屋根を銅板葺に、扉を新しくしていた玄関ですが、今回はすべて解体しました。

屋根は経年とともに変色していましたが、解体を進めると当時の輝きを残している部分もありました。



解体前の玄関屋根



銅板を剥がしました



古材が見えています



屋根解体終了

平成 16 年に修理した箇所はまだまだ新しく、その下にある古材とは色が違うことが分かります。古材には傷みの激しい箇所も見えています。これらも補修や新しい木材を継いだりしてなるべく再利用しますが、破損がひどく新たに制作した箇所もあります。

屋根の解体後は柱も**すべて解体**しました。敷石もこの後すべて取り外し、敷き直していきました。



玄関の解体が完了

▶▶ 骨組部分だけ残して解体が終了



床材の解体を進めました



床板を丁寧に外したあとは、支えていた材もひとつひとつ取り外していきました。

本堂は**半解体修理**となっているので、骨組だけの状態となったところで内部の解体工事が終了しました。

大きな柱を残していますが、下は基礎部分が見えるようになっており、屋根も軸部のみを残しているので素屋根まで見えるようになっています。



内部も解体が完了しました

続いて、基礎の補修や補強のために**建物全体を持ち上げる揚屋工事**を行いました。まずは基礎の石などを取り外し、建物を持ち上げるための準備をしました。基礎に使用されている石材は大きく重いので、機械を使って持ち上げました。



柱同士がずれないようにレールで繋ぎ、手作業で高さを揃えながら慎重にジャッキアップを行いました。写真を見比べると柱が浮き上がり**建物全体が持ち上がっている**のが分かります。



▶▶ 地盤沈下を防ぐために

本堂の破損は**地盤沈下**が原因とみられるものも多数ありました。

地盤沈下を防ぐために、今回の修理では一旦すべての基礎石を取り外し、基礎の底全面をコンクリートで固めました。その後、基礎石をひとつひとつ元の場所に据え直しました。このような自然現象に対する備えも文化財建造物を長く残していくためには重要なことです。



コンクリートで固めた基礎



▶▶ 基礎に使われている石材の補修

本堂の基礎石には**笏谷石**が使われています。このような石材にもすべてに番号を振り、詳細に記録をとったうえで慎重に取り外しました。そしてひとつずつ状態を確認し、割れや欠けなどがあれば専門の職人達が丁寧に補修していきました。



▶▶ 様々な形がある柱の根継^{ねつぎ}

建物が持ち上がったことであらわになった柱の根元は、シロアリや腐れなどで傷みがひどいものはその箇所を切り落とし、新たな木材と接合しました(根継)。

柱それぞれに傷んでいる箇所や程度が違いますので、それらに応じて根継の方法の詳細を決めて行いました。

写真でも様々な形で継いでいることが分かります。どのような形の継ぎ手があるか、完成後の本堂でぜひ探してみてください。



継ぐ形状に彫っています

▶▶ 揚屋工事の完了

基礎工事と柱の根元の補修が終わると、持ち上げていた本堂を元通りに下ろしました。このときも持ち上げた時と同じように、手作業で慎重に下ろしていきました。

写真で見ると基礎や柱の補修・補強がしっかり為されていると分かります。



この後は、柱の位置や傾きを一つずつ正しい場所に調整しながら定着させます。最後にレールや支えなど揚屋工事のために設置していた機材を取り外して搬出し、**揚屋工事が完了しました。**

シロアリ被害などによる柱の傷みや長年の地盤沈下の影響によって建具が歪むほど傾きがあった本堂ですが、ここで**傾きや柱同士の距離なども正しい位置**に戻しました。その位置を動かさないように、板やロープなどで仮固定して作業を続けていきました。



🚧 組立工事

揚屋工事が終わると組立工事が本格化していきました。

今回の修理工事では、修理前の状態ではなく建築当初の姿に復原した箇所がいくつかあります。そのための新たな部材の準備、また、建具の本格的な修復や耐震補強工事も同時に行っていました。



▶▶ 大きな梁も新しく

屋根を支える大きな梁も虫害などで傷んでいる箇所があり、今回の修理で新たに取替えました。



ちょうな
手斧を使い加工しました



新しくなった梁

傷みのため新しく取り替える木材はもとの古材の形状に合わせて加工します。その際には今ではあまり見られなくなった手斧^{ちょうな}と呼ばれる昔ながらの道具も使いながら加工していました。

▶▶ 耐震補強工事も行いました

組立工事と並行して、耐震補強工事も行いました。

正しい位置に修正した軸部を固定するとともに、地震の時に各部がばらばらに揺れることがないように部材の形状に合わせて補強材を取り付けました。



水平ブレース



形状に合わせた補強材

天井裏には水平ブレースとよばれる鋼材を取り付けました。これを取り付けることで、地震の横揺れの衝撃に強くなります。

さらにこけら葺下地となる周囲は、屋根下地に合板を張りつめることで建物上部の補強を行いました。



合板を張りつめました

✓ 残されていない箇所への復原

建築当初の形である茅葺とこけら葺という二重構造の屋根は、修理前の屋根と大きく形が異なります。古い絵図はありますが、詳細な図面が残されているわけではありません。

現状には残っていない箇所を新たに復原するので古材ではまかなえず、**新たな部材**が必要となります。



修理前解体中の本堂



原寸大の図面を起しました

その図面をもとに用意した新たな部材を使用し、古材との組み合わせを確かめながら慎重に組立工事を進めました。

復原した屋根は修理前とは大きく形が変わっていることが屋根を葺く前でも分かります。

そのため、ただ図面を用意するのではなく**原寸大の図面**を起し、古材と組み合わせてみて実際に部材を組み立てた時に問題が無いかを確認しました。



復原中の本堂

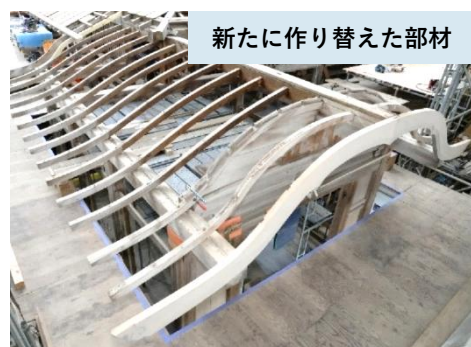
▶▶ 解体していた玄関の組立

柱も含めてすべて解体していた**玄関**も組立工事を行いました。

解体した古材は繕いや補修を行い、使用できるものは再び元の位置に戻して使用しました。



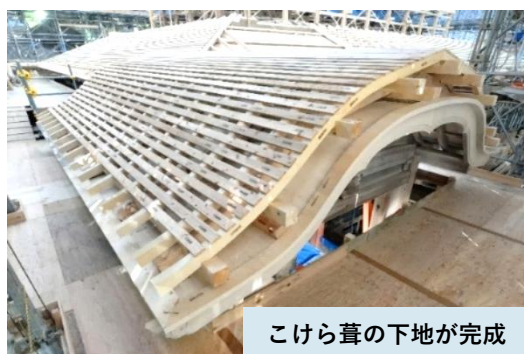
古材を繕った柱



新たに作り替えた部材



新たな部材が目立ちます



こけら葺の下地が完成

屋根部分は修理前の銅板葺から建築当初のこけら葺に復原するため古材でまかなえず、組立が進むほどに新たに用意した木材になっています。

屋根こけら葺

本堂下部周囲と玄関ではこけら葺の工事を行いました。こけら葺とは、こけら板と呼ばれる薄い手割りの板を幾重にも重ねて葺く伝統的な工法です。優美な曲線を作り出すことが出来るため、書院や客殿、寺院などでも多く見られます。

一列に並んで作業する職人



最初に玄関を、次に本堂の下部周囲を葺いていきました。薄い板が幾重にも重なり、四方には曲線も見える美しい屋根に仕上がりました。

使用したこけら板は 10 万枚以上になりました。

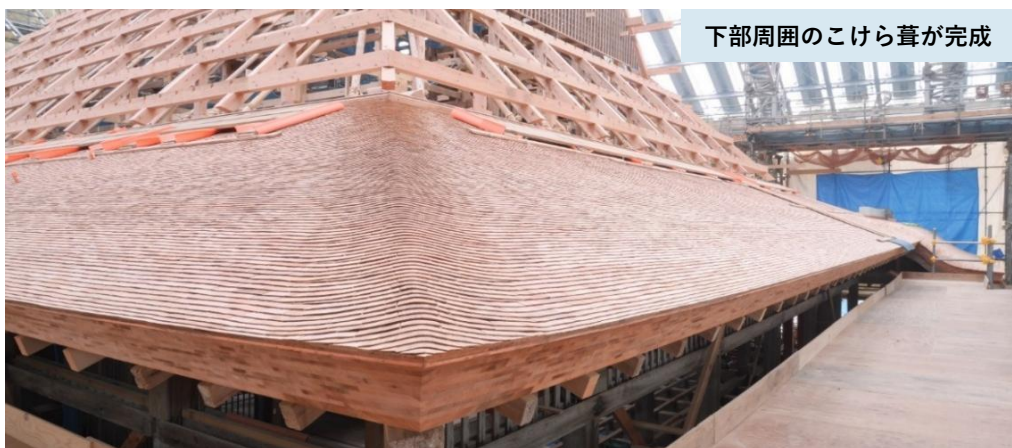
曲線も滑らかです



こけら葺の作業では、専門の職人達が昔ながらの技法で葺いていきました。

まず、一列に並び、ひとつかみの竹釘を口に含みます。そして口の中で釘の向きを変えて一つずつ取り出し、手で押さえていたこけら板に素早く打ち付けていきました。

下部周囲のこけら葺が完成



▶ 発見された建立当初の石鬼



石鬼と石棟を設置した玄関

玄関はこけら葺が完成したあと、石鬼と石棟を設置しました。

この石鬼は笏谷石で出来ており、建立当初に使用されていたとみられるものです。修理前の屋根には使用されていませんでしたが、今回の修理工事に伴う解体工事の際に発見され、再び上に戻すことになりました。



🚧 茅葺型銅板葺

本堂の屋根上部は積雪に備え、茅葺型銅板葺となります。

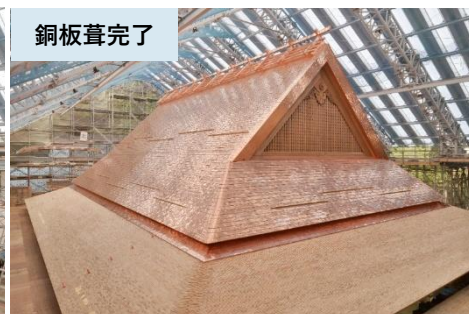
垂木をわら縄で縛りつける作業では、ハーネスで安全確保した職人が一番上の棟木に登り、ひとつひとつわら縄で丁寧に編みつけていきました。



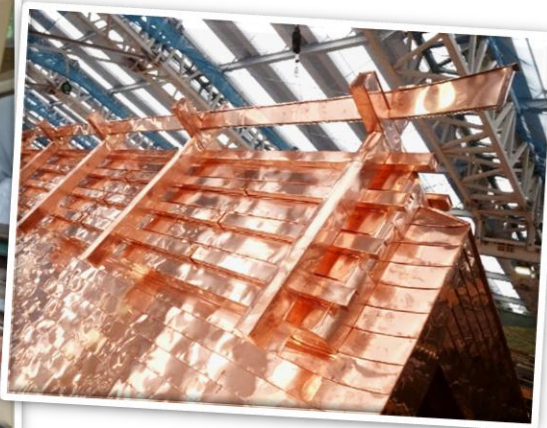
骨組が完成



下地が完了



銅板葺完了



近くで見ると棟の部分もひとつひとつの部材が**全て銅板**になっているのが分かります。

銅板葺は素屋根の中ではこのようにピカピカと赤茶に輝いていましたが、現在は赤褐色になっており、経年とともに風合いが変わっていきます。

▶▶ 懸魚^{げぎよ}を作り替えました

このように屋根の形が大きく変わり、部材も新しくなったことで、破風板にあった**懸魚**もその形に合わせて作り替えることになりました。

懸魚とは主に神社仏閣の屋根の破風板につけ、棟木や桁の先端を隠す**装飾板**のことです。もともとは魚の形をした装飾であり、水と関わりの深い魚をかけることで**建物を火災から守る**という願いが込められていると言われています。



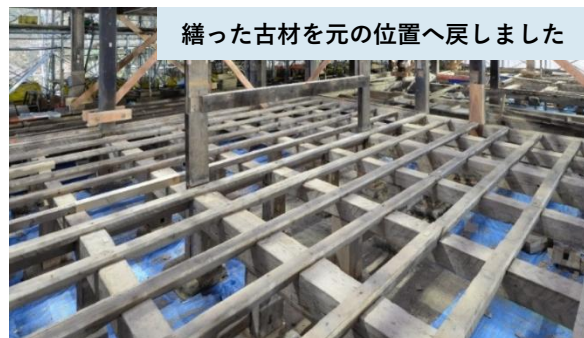
修理前の懸魚



新しくなった懸魚

内部の組立

屋根工事と同時に、本堂内部の工事も進めていきました。基礎工事のため解体していた床は解体の際に保存していた古材を繕い、再び元の位置に組み直しました。床の材料も木太く、かなりしっかりとした作りになっています。



繕った古材を元の位置へ戻しました

床板も原則としてもとの古材の痛んでいる箇所を繕い再使用しています。その場合も使わない古材を利用して繕ったり、新しく繕った部分は古材に合わせて色を塗ったりして、見た目に馴染むようにしています。



繕った部材



古色に塗りました

▶ 釘が見えない仕様の床板

本堂の床をよく見ると、釘が見えないことに気付かれると思います。

これは、^{め かすくぎ}目鋸釘と呼ばれる直角に折れた^{かぎ}鉤状の釘を使い、床下からしっかり固定することで床板の表面には釘を見せない仕様になっているからです。



釘の見えない床板

✓ 本堂内部の復原箇所

今回の修理工事では本堂の屋根が大きく変わっただけでなく、内部にも復原した箇所があります。

修理前は全面的に畳敷となっていた本堂ですが、建立当初の延宝ごろに描かれた古図や文政8年(1825)に描かれた指図には手前に土間が描かれており、室中や御成の間をぐるりと板敷が囲んでいます。室中の真ん中部分も拭い板になっていましたが、これらの部分は今回の修理工事で復原しました。



修理前の本堂内部



修理中の本堂内部



修理中の室中

▶▶ 建具の本格的な修復

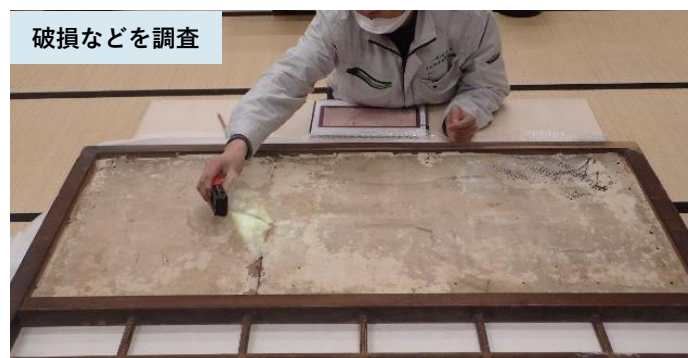
本堂の建具には建立時に**福井藩御用絵師の狩野元昭**の絵が描かれているものがあります。

狩野元昭は光通の父である第3代福井藩藩主・松平忠昌に召し抱えられた御用絵師・狩野了之の子で、江戸で奥絵師・狩野安信に学び、万治3年(1660)に父のあとを継いで福井藩御用絵師となりました。



狩野元昭による絵が描かれた建具(修復前)

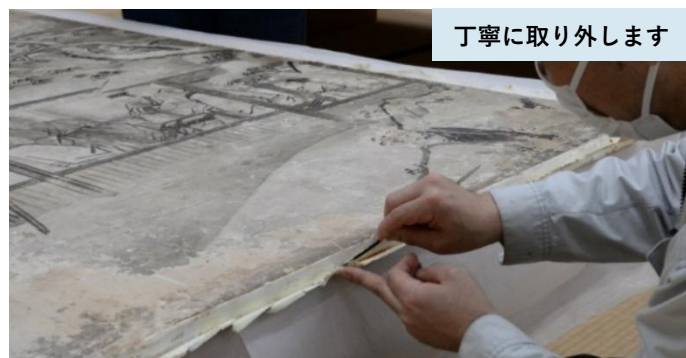
建立から約360年間に3度ほど修復が行われた記録が残りますが、今回の修理工事では専門の職人による本格的な修復を行いました。この修復作業も文化財修理の原則どおり、**現状保存のための修復**となります。



破損などを調査

まずは修復に必要な**調査**を行い、現在の状態とどのような修復作業が必要か確認しました。

調査のあと、建具から絵が描かれた襖紙を丁寧に取り外し、刷毛などで汚れなど付着物を取り除いていきました。



丁寧に取り外します



裏打ちの紙を取り外しています

杉戸に描かれた絵には、^{はくらくど}剥落止めを行いました。**剥落止め**とは、経年劣化によって亀裂や剥落を起こしている塗膜を下地に再密着させる保存技術です。これにより劣化の速度を遅くします。

その後、表に薄い和紙を貼り付けて表養生し、前回の修復で裏打ちされていた紙をピンセットなどですべて取り外していきました。その状態で抜けている箇所には繕いを行い、新たな和紙を貼り付けて**裏打ち**を行っていきました。

この作業は一度始めたら裏打ちするまで止められないため、襖一面に対して一日がかりで行いました。



剥離止めを行っています

▶▶ 土間の復原

今回の修理工事で土間に復原することになった本堂前列の落縁では三和土を行いました。

三和土とは土・消石灰・天然にがり^うを混ぜ合わせて練り、^う搗き固めた素材で、3つの材料を混ぜ合わせることからこの字が使われています。

この三和土を左官職人が専用の道具を使って丁寧に搗き固めていきました。



三和土を行いました



復原した土間

▶▶ 伝統的な技術による左官工事

内部では伝統的な技術で土壁をつくる左官工事を行いました。

まずは小舞竹^{こまいたけ}と呼ばれる竹材を格子状にわら縄などで編み上げ直し、荒壁土を塗りつけて下地を作りました。



小舞竹を編んでいます



荒壁土はもともと本堂に使用されていた壁土と新しい土、そして藁を混ぜて長時間寝かせたものになっています。この荒壁土を塗ったあと数ヶ月乾燥させたのち、次は中塗り^{なかつり}をしました。

下地から荒壁、中塗り^{なかつり}と数か月しっかり乾燥させてから土を塗り重ねていくという作業を繰り返しました。

そして最終段階の上塗りという作業では白い漆喰^{しっくい}を重ねて仕上げました。



仕上がった壁

左官職人の丁寧なコテ捌きと時間をかけた作業によって、白く美しい壁が蘇りました。

▶▶ 玄関の敷石と新しい懸魚

かつて藩主が出入りしていた大玄関の土間には、^{しゃくだにいし} 笏谷石が敷き詰められていました。建立から時間の経過とともにズレや歪み、ひび割れや欠けが生じていましたが、補修して隙間無く綺麗に据え付け直しました。

隙間なく仕上がりました



新しくなった懸魚



また、劣化が著しかった屋根の部材を新たにすることで、玄関の懸魚も新しくなっています。ぜひご注目ください。

▶▶ 紙を貼り重ねて仕上げる^{はりつけかべ}張付壁

藩主を迎える御成の間の一部や仏壇の壁は和紙を貼って仕上げる張付壁となっています。修理前の右の写真でも上部は漆喰で仕上げた土壁ですが、床の間は色が違うのが分かります。

張付壁は書院などでみられる壁で、襖のように絵が描かれている場合もあります。



修理前の床の間

今回の修理工事では、職人が手作業で新たに紙を張り直していきました。まずは下地の上に、紙の周囲だけに糊を塗布して下地に全面を密着させないように太鼓張り、その後は全面に糊付けした紙を胴張りしました。

次に、細長い紙を少しずつずらして重ね蓑状に張り蓑掛けをしました。この時も和紙は数カ所だけに糊で張り付け、中央はふんわりと浮かせています。

その後は全面に糊をつけた紙を張る蓑縛りをしました。

また四方を糊付けした紙を貼り(浮け)、全面糊付けした紙を貼り重ね(浮け縛り)、最後に^{がんびし} 雁皮紙を上張りして仕上げました。仏壇の壁も張付壁になっています。



▶▶ 建具の仕上げ

修理前は地盤沈下などによって建物の骨組が歪んでいたことで、建具にも傷みや歪みが出ていました。

これらは別の場所で補修していましたが、出来上がった建具を実際に建て込みサイズの確認や動きの調整を行いました。この調整をもとに、専門の工房で補修している襖絵や障子紙貼り、漆塗りなどの仕上げ作業を行いました。



建具を調整しています



内部の工事が終盤になり、仕上げ作業が終わった建具を建て込みました。建具が入ると一気に完成が近づいたように見えます。

福井藩の御用絵師・狩野元昭による襖絵が描かれた建具も修復を終えて建て込みました。室中の正面にある扉や仏壇は、漆を塗って仕上げてあります。

福井藩の御用絵師・狩野元昭による襖絵が描かれた建具も修復を終えて建て込みました。室中の正面にある扉や仏壇は、漆を塗って仕上げてあります。

⚠ 素屋根の解体

屋根や壁などの外側の工事が終わると素屋根の解体が始まりました。組み立てた時とは逆の工程になります。

まずは柵足場など内部の足場を解体しました。屋根工事のために屋根近くに作っていた足場がなくなると、素屋根内が広くなり、建物の大きさが際立ちました。



柵足場を解体した内部



クレーンでトラスをおろします

その後は外部を解体していきました。覆っていた折板を外し、骨組のトラスという部材を取り外しながらクレーンで吊り上げて運び、外側も解体していきました。

ぴかぴかと輝いていた銅板葺の屋根も、雨に濡れると色を変えました。今後も経年によってその風合いを変えていきます。



屋根が見えています



周辺足場が解体



素屋根解体完了

